

## 東北支部 夏の講演会の報告

都市計画学会東北支部 夏の講演会が平成24年7月8日(日)午後、東北大学片平キャンパスのギャラリートンチクにて開催されました。本年は筑波大学の大澤義明先生をお迎えして、「縮小時代における都市解析研究の意義 人口フレーム、施設配置、土地利用規制」というタイトルで開かれ、20名の参加者を得ました。

ギャラリートンチクは東北大学の震災復興のための仮設校舎にあります。仮設ではあっても開放的な魅力的な場所になっています。

最初に相羽東北支部長の挨拶がなされ、それに続いて講演となりました。大澤先生による4つの論文が配布されましたが、時間の制約もあり、そのうち3つが講演されました。

最初の話題は“市町村総合計画における計画人口の過大性”です。まず、市町村の総合計画での将来人口と国立社会保障・人口問題研究所の調査との比較結果、過大推計が大変多いという傾向が説明されました。近年は高齢化社会に対応することが進み、推計のずれの幅が小さくなりつつあるようです。過大推計に基づいた都市計画は過大投資による市町村財政の悪化につながりかねないので、重要な問題となります。それが回帰分析を中心としたわかりやすい枠組みで話されました。質疑は話題ごとにされました。この問題については7つの質問・コメントがあり、高い関心を引きました。

二番目の話題は人口分布の変化に対応した郵便局配置の見直しについてです。解析分野で施設配置問題は大変ポピュラーな話題です。ここでは逐次配置問題として郵便局を考えるに当たっての大澤先生の整理が大変わかりやすく説明されまし

た。それは“貪欲算法”・“けちけち算法”と名付けられた、施設の追加と削減の二面からの配置問題です。既に始まっている縮小時代では従来それほど注目されていなかったけちけち算法が重要になり、その結果、大変な不便がおきる可能性が指摘されました。質疑では、郵便局利用者の郵便局への移動の総所要時間の最小化でいいのか、最大距離の最小化(センター問題)の方が重要でないのかといった意見が出され、議論されました。

三番目の話題はがらりと変わって夜景の魅力を都市解析の考え方で計量分析する話です。まず、函館の夜景が例示され、世界三大夜景の紹介に進みます。夜景をどう計量するかというくだりで、“立体角”の概念が導入され、視野の中で夜景がどの程度の広さを持つかが説明されました。すると、DIDの広さにも関係しながら、夜景がどのくらいの広さを感じるかということ、標高に関する関数で明らかにしました。函館山は標高334mなのですが、標高696mまで上がると見え(立体角)が最大なる、しかし、それ以上標高が上がると夜景はむしろ小さく見えるようになっていくという興味深い結果が説明されました。さらに道路による線的な景観、またそれが幅員と密接に関係することが示されました。質疑では、俯角が重要ではないかといった意見が出されました。

大澤先生のご専門の解析分野の考え方が全く異なる様々なトピックに適用され、問題解決への視界を開く興味深い講演会でした。

(文責：古藤浩／東北芸術工科大学准教授)

